〔東京家政大学研究紀要　第29集，p. 55〜61，1989〕

女子学生の生き方についての意識調査
——教育環境アセスメントに関する研究第7報告——

金平文二*・岩井絹江**

（昭和63年9月30日受理）

Opinion Survey of Life Styles of Woman Students
——A Study to Assess Educational Environment——

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received September 30, 1988)

はじめに

わが国における高齢化社会の到来は，それぞれの世代の考え方や生き方にいろいろな影響を及ぼしていると思われる。現在の青年層にとっては，そのことは40年〜50年先きのことかもしれないが，青年の意識・態度・行動などにどのような影響を及ぼしているか，その一つの指標として〝生き方〟について調査を行い，青年の意識の実態について把握することによって，青年の理解の面で何らかの示唆を得ようとしたものである。

Ⅰ　研究の目的

わが国の高齢化は著しく，特に女性の平均寿命は年々伸び，女性の人生80年とも85年ともいわれる時代が到来してきている。これとともに女性のライフスタイルは，従来の〝親に育てられる時代，結婚・子育て時代〟というパターンから〝育てられる時代，子育て時代，子離れ後の時代〟へと変化してきており，今や子育てを終えた女性が80才を迎えるまでには30〜40年間あることになる。

そこで，最近の女子学生がこのように変化しつつある時代にあって，将来どのような生き方をしようとしているのかを把握することによって，現代の青少年の行動傾向を的確に把握し今後における指導の指針を得ようとするものである。

Ⅱ　研究の方法

研究の方法として，質問紙法による意識調査によってデータの収集，分析を行うことにした。

1　調査対象

今回の調査はパイロット・スタディであるため，本学大学1年（新入学年），大学2，3年（中間学年），大学4年（卒業学年）に対して，いくつかのクラスを無作為に抽出し，調査対象とした。質問紙の配布数は308名で回収率は97%である。

2　調査の実施期日

昭和63年7月7日〜7月14日の期間に適宜，調査を実施，各学年において，調査対象者に調査の主旨を説明し，調査票の配布・回収を行った。

3　質問票の設計

調査票の質問分野は次のとおりであり，選択式の質問項目及び自由記述による調査票を設計した。

・選択式質問　10問
　i 生きがいの対象
　ii 将来の生き方
　iii 将来の仕事
　iv 将来のライフ・スタイル
・自由記述式　2問

回答方法は，別紙の回答用紙に記入させる方式とした。

4　調査結果の集計と結果

調査データの集計は手作業によって行い，調査対象を新入学年（大学1年），中間学年（大学2，3年），卒業学年（大学4年）の3グループ別に，各質問項目における選択肢の度数，パーセンテージを算出して図式化し，それらの結果について考察を行った。

結果の数表による表示は省略し，学生区分別に，質問項目についての選択肢別のパーセンテージを比較棒グラ

*　児童学科
**学生部

フで表示した。調査結果の概要は以下のとおりである。

5　調査結果とその考察

問1．あなたが人生で一番求めているものは何ですか。

1．愛情や誠実さ
2．お金や地位
3．やりがいのある仕事
4．打ち込める趣味
5．信仰による救い
6．何を求めてよいかわからない
7．その他

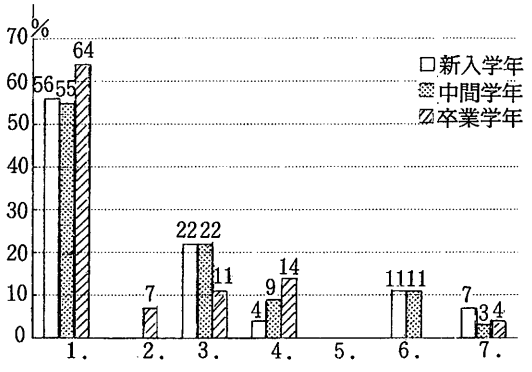

図1　人生で一番求めているもの　学年別（%）

人生で一番求めているものについては「1．愛情や誠実さ」を各学年共に半数以上の学生があげており，特に卒業学年では64%にもなっている。新入学年，中間学年の第2位が共に「3．やりがいのある仕事」（22%）となっているのに対し，，卒業学年の第2位は「4．打ち込める趣味」（14%），第3位「2．やりがいのある仕事」（10%）となっている。就職まで数年ある学生に比べ，目前にしている卒業学年の方が「2．やりがいのある仕事」が10%近くも少いことが気になる。理想や夢としていた職業につけないことや，現実が見えてきた学生が多くなってきているためだろうか。

また，新入学年，中間学年が共に第3位に「6．何を求めてよいかわからない」（11%）をあげており，一割以上の学生がこれからの人生で求めるものがわかっていないことになる。

最終学校である大学教育の中で，自分が見えるような教育内容や教育環境がさらに必要であろう。

問2．あなたがこれから生きていく上で生きがいの対象は何におきますか。

1．1日1日を愉快に楽しく生きること
2．生活の目標をたてて着実に生きること
3．家族や友人とよい人間関係をつくること
4．子供や家族のためにつくすこと
5．能力を発揮して自分にしかできないものを生みだすこと
6．人間的により豊かなものを求めて努力すること
7．趣味など好きなことに打ち込むこと
8．その他

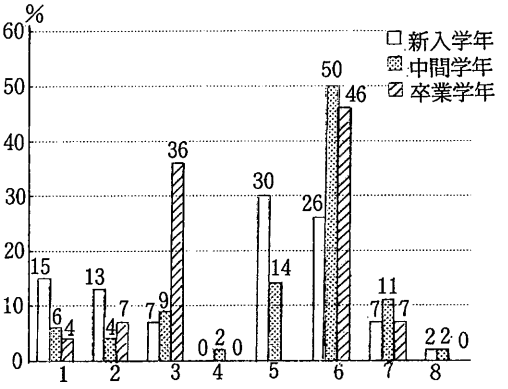

図2　生きがいの対象　学年別（%）

生きがいの対象は何におくかという質問に対しては，各学年で別々の傾向を示している。新入学年は，第1位「5．能力発揮」（30%），第2位「6．人間的に豊かなものを求める」（26%），第3位「1．愉快に楽しく生きる」（15%）となっているのに対し，中間学年は第1位「1．」（39%），第2位「6．」（11%），第3位「7．趣味に打ち込む」（9%）となっている。

また，卒業学年の第1位は他と同様「6．能力発揮」（46%）だが，第2位には「3．家族や友人とよい人間関係をつくる」があげられており他学年では7%であるのに対し，卒業学年では36%にもなっている。

全体的には，どの学年も30〜50%の学生が生きがいの対象を「能力を発揮して自分にしかできないものを生み出すこと」をあげており，前向きな傾向を示している。

問3．あなたは将来，どのような生き方をしたいですか。

1．結婚をせずに仕事を続け，仕事上で何かを達成したい
2．結婚をせずに仕事は続けながら，自由に楽しく

過ごしたい

3．結婚をしても子供はつくらず，仕事を続けながら夫婦で楽しく過ごしたい

4．結婚はするが，夫と家事・育児を平等に分担し仕事を続けたい

5．結婚をし，家族の協力を得て，仕事・家事・育児・趣味とバランスよくやっていきたい

6．子供が出来たらやめて，大きくなったら再び自分の能力を生かして働きたい

7．子供が出来たらやめて，家庭に入り家庭中心の生活がしたい

8．大学卒業後数年あるいは結婚までのある時期だけ，社会勉強のため勤めてみたい

9．仕事はしないで好きなことをしていて，いい人がいたら結婚して家庭に入り，のんびり過ごしたい。

10．将来のことは結婚相手次第である

11．その他

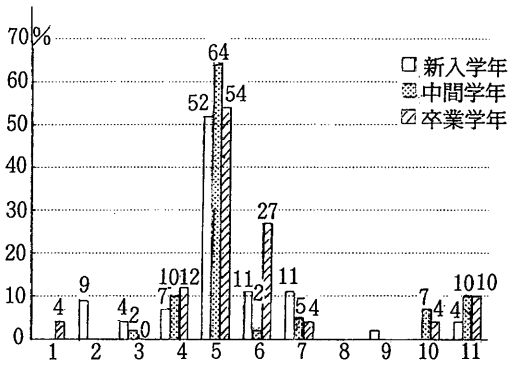

図3　将来の生き方　学年別（%）

将来の生き方については，結婚を基準に選択肢が作成してあったせいもあるが，「5．結婚をし，家族の協力を得て，仕事・家事・育児・趣味とバランスよくやっていきたい」を新入学年（52%），中間学年（64%），卒業学年（54%）が共に第1位にあげており，結婚後も仕事を持って幅広い生き方をしたいと考えているようである。また，「6．子供が出来たらやめて大きくなったら再び自分の能力を生かして働きたい」という項目が他学年に比べ卒業学年だけが27%と高くなっている。

他の項目については各学年とも10%以下の数値で似たような傾向を示しているが，就職については，従来の女子学生の傾向として目立っていた「社会勉強のため」や「仕事をしないで好きなことをしていたい」とする学生が，今回の調査ではほとんどなかった。

さらに「10．将来のことは結婚相手次第である」という項目を選んだ主体性のない学生が中間学年に7%，卒業学年に4%いることが気になる。

「11．その他」の項目が中間学年，卒業学年に各々10%あり，自由記述では「結婚するしないに関係なく仕事をしたい」，「結婚より仕事のことをまず考えたい」，「結婚するしないにかかわらず一生仕事をしたい」など仕事のことを前面に出したものが多かった。

問4　あなたは結婚についてどう思いますか。

1．なんといっても女の幸せは結婚にあるので，結婚したほうがよいと思う

2．精神的にも経済的にも安定するから，結婚したほうがよいと思う

3．人間である以上当然のことだから結婚したほうがよいと思う

4．一人立ちできればあえて結婚しなくてもよいと思う

5．結婚は女性の自由を束縛するから一生結婚しないほうがよいと思う

6．その他

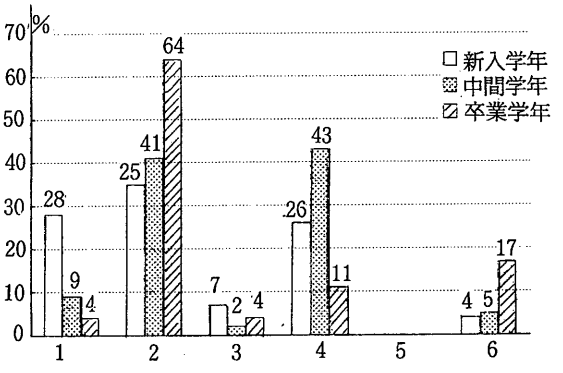

図4　結婚について　学年別（%）

結婚についての具体的質問に対しては，各学年で多少傾向が異っており，新入学年の第1位は「2．精神的，経済的に安定するから結婚したほうがよい」（35%），第2位「1．女の幸せは結婚にある」（28%），第3位「4．1人立ちできれば結婚しなくてよい」（26%）となっている。中間学年では他学年とは大きく異なり，第1位に「4．1人立ちできれば結婚しなくてよい」が43%とい

う高い数値であげられている。

また，卒業学年の第1位は新入学年と同様「2．」であるが64%と高い数値を示している。全体的にみると，やはり「2．」が46〜47%と一番多いが，「4．1人立ちできればあえて結婚しなくてもよい」が27%と第2位になっており，この結果は10年位前のこの種の調査に比較すると大きく変化し，女性の意識のあり方，女性を取りまく環境が変化してきているといえよう。

さらに，その他の項目の自由記述では，「自然の流れにまかせる」，「本当に結婚したいと思う人があれば結婚した方がよいが無理に結婚する必要はない」，「人それぞれの価値観で結婚したいと思う人はすればよい」等の回答が多くみられ，特に卒業学年でははっきりその旨を明記している人が目立った。

問5．あなたが結婚後職業を続けるとしたら，その理由は何ですか

1．家計の足し，暮しを楽にする
2．子供の教育費を得る
3．家庭の外にも視野を広める
4．自分の能力を生かして社会に貢献する
5．将来に備えて貯蓄する
6．自分の生活を豊かにする
7．その他

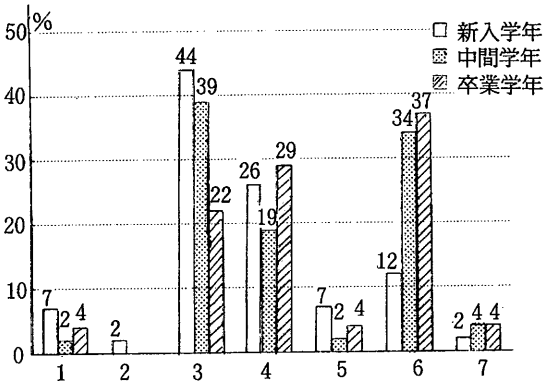

図5　結婚後職業を続ける理由　学年別（%）

問3の将来の生き方についての質問では，大部分の学生が結婚後も職業を続けたいとの意志表示をしていたが，問5の職業を続ける理由に対しては，各学年で傾向が多少異っている。新入学年では「3．視野を広める」（44%），「4．能力を生かして社会に貢献」（26%）が上位になっており，中間学年では「3．視野を広める」（39%），「6．自分の生活を豊かにする」（34%）が上位になっている。

さらに卒業学年では「6．自分の生活を豊かにする」（37%），「4．能力を生かして社会に貢献」（29%），「3．視野を広める」（21%）と上位になっている。

今日，労働人口の2人に1人は女性といわれているが，30〜40代の女性に働く理由を調査すると半数以上が「家計の足し」，「教育費を得る」ことを目的としている。この理由が前向きでないとはいわないが，長い人生を考える中で自分がより満足し，自己を高めるために続ける職業であってもらいたい。

問6．女性と職業についてどう思いますか。

1．女性も男性と同様に職業を持ち，女性の能力を発揮し社会に貢献すべきである
2．女性も職業を持ち，仕事によって自分を生かすということが大切である
3．女性も将来のため，暮しを楽にするために職業を持ったほうがよいと思う
4．女性が職業を持つことは，負担も大きいのであまり重要な仕事につくべきではない
5．女性が職場に進出すると男性の職場を奪うことになるし，ほどほどにすべきである
6．女性はいつも家庭のことを考えるべきで，万一のときは社会制度の中でなんとかなるので仕事のことなど考えなくてよい
7．その他

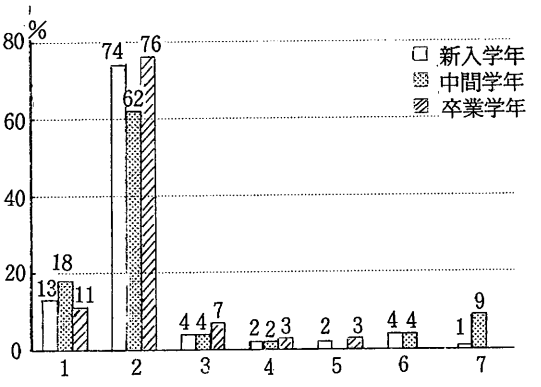

図6　女性と職業について　学年別（%）

女性と職業についてどう思うかという問に対しては，どの学年も「2，女性も職業を持ち，自分を生かすことが大切である」（新入学年74%，中間学年62%，卒業学

年75％）が圧倒的に高い比率を示している。さらに，「1．女性も男性と同様に職業を持ち，女性の能力を発揮し社会に貢献すべきである」と考えている学生も10～18％位おり，全体的に職業に対しての前向きさがうかがえる。「重要な仕事につくべきではない」，「ほどほどにすべきである」，「女性はいつも家庭のことを考えるべきで仕事のことなど考えなくてよい」などの職業に対しての否定的回答はごく少数であった。

問7．女性の将来の仕事についてどう思いますか。

1．女性も高度な専門知識や柔軟な思考力を発揮して，おおいに仕事をしていくべきだと思う
2．女性もある部門を責任を持って担当し，自分のアイデァを発揮すべきだと思う
3．人間関係が悪くならないように男性を立てながら仕事をしていくべきだと思う
4．男性も女性も差はないので対等の立場で仕事をしていくべきだと思う
5．女性の職場での地位は，それほど急には変らないのでほどほどでよいと思う
6．その他

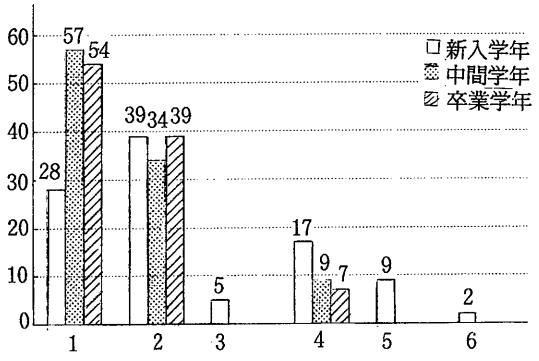

図7　女性の将来の仕事について　学年別（％）

女性の将来の仕事に対する具体的な質問については，多少比率の違いはあるが全体的な傾向としては同様で，「1．高度な専門知識や柔軟な思考力を発揮しておおいに仕事をしていくべき」，「2．女性もある部門を責任を持って担当し，自分のアイデァを発揮すべき」と大部分の学生が回答している。「5．女性の地位は変わらないのでほどほどに」という否定的意見をあげているものが新入学生で9％いるが，他学年では0％になっている。

また，「4．男性も女性も差がないので対等の立場で仕事をしていくべき」という項目をあげた学生が新入生では17％いるが，他学年では10％弱である。

問8．あなたは将来，自分の子供にどのように育ってほしいですか。

1．女の子には女らしく，男の子には男らしくたくましく育ってほしい
2．女の子は女らしさを，男の子は男らしさを持ちながら，各々自立した子に育ってほしい
3．自分をはっきり主張でき，強く生きていける子になってほしい
4．周囲に合わせながら，他人を思いやれる子になってほしい
5．女らしく，男らしくではなく，人間として社会の一員として自立して育ってほしい
6．その他

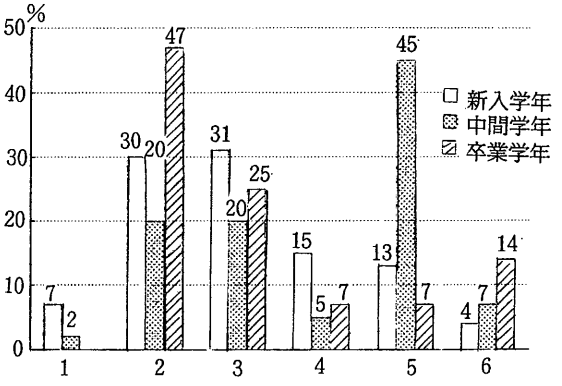

図8　将来の自分の子供について　学年別（％）

これまでの質問とは多少異り，将来の子供のことを聞いているので，学生の立場では具体性に欠けるためか，各学年で様々な傾向が表れている。新入学年では「2．女らしさ，男らしさを持ちながら各々に自立した子に育ってほしい」（30％），「3．自分をはっきり主張でき，強く生きていける子になってほしい」（31％）が上位にあげられている。これに対し，中間学年の第1位は「5．人間として社会の一員として自立して育ってほしい」（45％）で高い比率を占めている。

また，卒業学年では傾向は新入学年と似ているが，「2．女らしさ，男らしさを持ちながら，各々自立した子に育ってほしい」が47％と高い数値を示している。しかし，今までよく言われていた「女の子らしく，男の子らしく」を選んだ学生はほんの少数であった。

問9．あなたは老後の生き方をどう考えますか

1．家族や孫たちに囲まれて，にぎやかにのんびり

した生活をしたい

2．子どもたちにあまり頼らず，独立して趣味などに打ち込み自由な生活がしたい

3．家族の近くにいて困った時は助けて貰いたい

4．経済的に安定していれば，家族とのかかわりはあまり持ちたくない

5．経済的にも，生活的にも，人に頼らず自立していきたい

6．その他

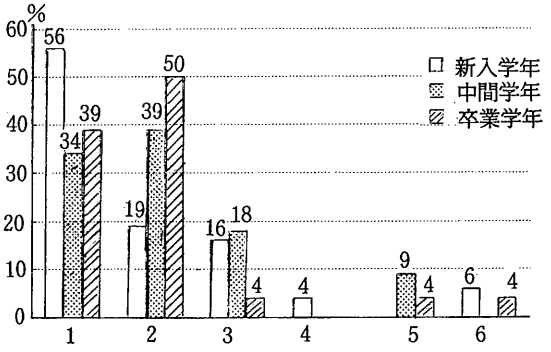

図9　老後の生き方について　学年別（%）

老後の生き方については，新入学年の半数以上が「1．家族・孫に囲まれてにぎやかにのんびり生活したい」をあげているのに対し，卒業学年の半数が「2．子どもたちにあまり頼らず，独立して趣味などに打ち込み自由な生活がしたい」と考えている。中間学年では「1．」，「2．」共に35%前後だが，「5．人に頼らず自立していきたい」と考えている学生も10%近くいる。「4．家族とのかかわりはあまり持ちたくない」を選んでいる学生はほとんどいない。老後はなんらかの形で家族とかかわりあいを持ちながら，自分なりの生活をしていきたいと考えているようである。

問10．あなたの将来のライフ・スタイルについてどう思いますか。

1．自分の余暇活動をフルにエンジョイするような生活がしたい

2．家庭，仕事，余暇を公平に配分したい

3．余暇はあくまで余暇で仕事も家庭も重視したい

4．仕事中心の生活をしたい

5．家庭生活をあくまで中心におきたい

6．その他

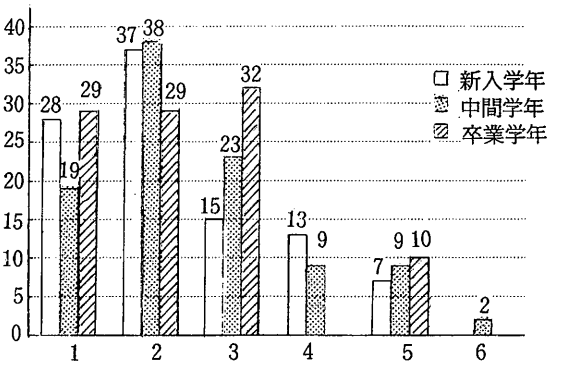

図10　将来のライフ・スタイルについて　学年別（%）

ライフ・スタイルについての質問に対し，各学年毎にみると多少傾向が異るが，全体的には「2．家事，仕事，余暇を公平に配分したい」が多くなっている。「4．仕事中心」，「5．家庭中心」と考えている学生も各々10%前後いるが，他の選択肢に比べると数値は低い。

高齢化社会に入り，望むと望まざるとにかかわらず，女性だけでなく，男性も生き方を変えざるを得ない状況にあると思われる。女性が家庭や子供のためだけに生きるライフ・スタイルではなく，一個の人間として自立し，自分を生かしながら長い人生が生きていけるようなライフ・スタイルが確実に描け，実践していけるよえな，教育環境，教育内容でなければならない。

おわりに

以上の調査結果によって，女子学生の生き方について堅実ではあるがかなり進歩的な生き方をしようとする学生が増加してきているように思われた。どのような生き方がのぞましいかは，それぞれの個人の問題であるが，職業や家庭のありかたなど女子学生の生き方の一端を知り得たように思う。今後さらに広範囲にわたる調査を継続研究として実施し，より望ましい教育環境のあり方を考えていきたいと思っている。

参考文献

1．金平文二・岩井絹江：女子学生の意識についての調査―教育環境アセスメントに関する研究―第1報告　東京家政大学研究紀要，24，pp．49―69（1984）

2．金平文二・岩井絹江：人間成長過程における教育環境阻害要因の探索―教育環境アセスメントに関する研究―第2報告　東京家政大学研究紀要，25，pp．

53—62（1985）
3．金平文二・岩井絹江：教育環境を阻害する各種要因の探索—教育環境アセスメントに関する研究—第3報告　東京家政大学研究紀要，25，pp．61〜68（1985）
4．金平文二・岩井絹江：教育環境アセスメントに関する研究—第4報告　東京家政大学研究紀要，26，pp．141〜147（1986）
5．金平文二・岩井絹江：青少年の問題行動についての分析—教育環境アセスメントに関する研究—第5報告　東京家政大学研究紀要，27，pp．91〜96（1987）
6．金平文二・岩井絹江：女子青年の意識についての調査—教育環境アセスメントに関する研究—第6報告　東京家政大学研究紀要，28，pp．29〜37（1988）